

年間第十九主日

2018.8.12

ヨハネ 6・41-51

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今年間第十九主日は、平和旬間の日曜日に当たっています。ここに集ったわたしたちも、特別な思いをこめて今日のミサをささげ、広島、長崎の原爆の犠牲となった方々、更には、あの戦争の犠牲となった全ての方々のことを想いおこし、心に想いうかべて祈りたいと思います。同時に、人間の仕業として引き起こされ、繰り返される戦争の犠牲となって悲惨な死を遂げねばならなかった無数の人々のいのちの叫びを、全てのいのちの与え主である神がどのように聞かれ、そのような悲惨な死を平然と生み出す、人間の冷酷で愚かなしわざが神の御目にどのように映っているかに思いを馳せ、神のみ前に頭を垂れたいと思います。

今日の福音にも、先週に続いて「わたしは天から降って来たいのちのパンである」とのヨハネ 6 章のイエスのみことばが響いています。わたしたちの耳には聴きなれたものとして響くかもしれないこのみことばを、平和旬間の日曜日の今日、特別な思いをもって心に留めたいと思います。「わたしは天から降って来たいのちのパンである」とイエスが言われるとき、そのパンとは、わたしたちが自分たちの生存のために、それを獲得しようと狂奔している物質的なパンを意味するのではないことは明らかです。けれども、イエスが言われる「いのちのパン、いのちの糧」を霊的ないのちにかかわることとしてのみ理解し、わたしたちのこの世のいのちとは関係のない、信仰による永遠のいのちの世界にだけ限定して受け止めることは、人間であるわたしたちのありよう全体に向けて語りかけるイエスの福音のみことばの本来の力を殺いでしまうことになるかもしれません。

イエスはこの世の生を生きるわたしたちのもとに天から、神のもとから降って来て下さったいのちのパンです。そのようなお方としてのイエスのみことばが、この世の生を生きるわたしたちの最大の関心事である生存のための物質的なパンと全く無関係のことを語っているとは思えません。

「わたしはいのちのパンである」とのイエスのみことばは、「人は何によって生きることが出来るのか。人は何によっては生きることが出来ないのか」という、わたしたちがあの戦争によって犠牲となった無数の人々の魂の叫びとして学ぶべき、わたしたちの根本的な問いに対する聖書の啓示のことばであると思

います。わたしたちがああ悲惨な体験を通して学んだことは、自分たちの生存のために、他の人々の生存のための糧を奪い合ってはならないということであつたはずで、戦争はどのような意義づけをもってしても正当化することが出来ない国家間の、民族同士のむき出しの生存競争です。国家が国家としての存続を維持し、民族が民族としての優位性を確保するためにはいかにこの生存競争を勝ち抜くことが出来るか、そのことだけがわたしたちの世界の構図を決める、そのような時代をわたしたちは生きてきたし、今も生きています。あのような世界規模の悲惨な戦争の歴史を生きてきたわたしたちの世界は、今尚、あの戦争を引き起こしたいのちの糧をめぐる愚かな争奪戦から脱してはいません。今尚、世界の各地で繰り返されている戦争の悲惨さは、世界を生存競争の場とする者たちが生み出した今の世界の構図を変えることなしには解決されることはありません。

わたしたちは、わたしたちを剥きつけの、冷酷な生存競争に駆り立てるわたしたち自身のうちにある凶暴な本能を抑える重石を必要としています。「わたしはいのちのパンである」と言われるイエスのみことばは、このような歴史を生きてきた、そして今も同じ愚かさを繰り返そうとしているわたしたちに、何を語りかけようとしているのでしょうか。

人はパンのみによって生きるのではない。しかし人はパンなしには生きることができない。この世の生を生きるものとして、このジレンマを歴史を通して生きてきたわたしたちが学んだはずのことは、パンをめぐる争奪戦は人類全体を悲惨な死に追いやるということであつたはずで、もう一度ヨハネ 6 章の最初の記事に戻って、五つのパンと二匹の魚をイエスに差し出した、あの少年の姿にわたしたちは学ばなければなりません。何の見返りも求めず、何の経済的対価も要求せず、イエスのみ手に差し出すようにして、わたしたちが分かち合うわずかのものが、力ある者たちの有形無形の搾取によって貧困と飢餓に苦しむ無数の人々の今日の糧を支えることが出来る世界を作り上げることを信じたいと思います。「わたしはいのちのパンである」と言われる、愛そのものであるイエスのみ手を通して分かちあわれるパンを、わたしたちも、あの少年のようにそっとイエスのみ手に差し出すことが出来たらと思います。

天からのいのちのパンであるイエスが教えてくださったことは、人が生きるのには奪い合うようにして手に入れるパンによるのではなく、わたしたちのいのちの原風景である家族同士がそうしているように、そしてイエスに従う者たちがそう命じられているように、天の父の子らとして、銘々が銘々に必要なパンさえも互いに分かち合う愛によるということではないのでしょうか。

平和旬間の主日のこの今日のミサで、あらためて、この世の糧をめぐる愚か

で苛烈な生存競争の結果として引き起こされた戦争の犠牲となった無数の人々が、そのようなわたしたちの現実の世界の証人として神のみ前に立ち、後を絶つことのない、この世を生きる者たちの傲慢な愚劣さを糾弾する声に耳を傾けたいと思います。心底その声に打ちのめされて、わたしたちが今もそこから解放されずいるこの世界の生存競争と報復合戦の犠牲となった方々が、この世の底知れない苦しみと悲しみから解放され、神のみが与えて下さることの出来る永遠のいのちの糧に満たされてあることを、深い悲しみのうちに祈りたいと思います。